
自殺の証明

双葉れごと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自殺の証明

【Nコード】

N6540J

【作者名】

双葉れごと

【あらすじ】

自殺についての考え方。シリアスだったり重かったりはしないで
す。

「自殺——ってのは自分を殺した、ってことだろ」
「そうじゃな」

若干偉そうな少年に老人は気のない返事をした。

「その手段はたくさんある。ナイフで自分の首をかき切る。川に入っておぼれる。練炭を車の中でたいて一酸化中毒になる。どれでも死ぬ。ナイフで手首を切るのもアリだ」

「そうじゃな」
「しかし、だ」

少年は老人の気のない返事を気にせず語り続ける。

「それはナイフが殺したといっても過言じゃない、と言えないか？ ナイフがなければ少年は死ななかつたし、思いとどまる事も出来たかもしれない」

「じゃが、死を選んだのは少年じゃ。ナイフは少年の自殺を止めることはできないのじゃから、それは自殺じゃ」

「じゃあ、意思を持たないように育てられた人間がいるとしよう。親の言う事のみを聞いて自分では何も考えない、忠犬というより機械みたいな人間だ。そいつが親に殺せと言われて殺したら他殺か？」

「ふむ……………それは自殺じゃろう。もしその人間に意思があったなら別じゃが、意思が育たないように教育された人間を人殺しと責めるのは酷じゃろうて。それに本人も人を殺したという理解はできておらぬじゃろう」

老人は静かにそう言う。少年はまだ語る。

「今度は逆に、相手に敵意があったら？」

「それは明確な殺人じゃろ」

「殺される人間がわざと殺されたら？ 銃弾を避ければ死なないけど、ここで俺が死ねば周りの人間は助かる、みたいな状況で自ら死を選んだら？」

「それでも殺人じゃ。本人に死ぬ意思があったとしても、相手は銃弾があたれば死ぬと知りながら、相手に敵意をいだいて撃ったんじゃないから。殺意や敵意が一片でもあれば、それは殺人じゃ」

その言葉を待ってたとばかりに若者は嬉しそうに言う。

「という事で俺は自殺したんじゃない。彼女が俺をつったから俺は死んだ。付き合ってくれなきゃ死んでやるとまで言ったのに彼女は、

『死んで私の前に二度と現れないで』

とまで言った！ つまり俺は彼女によって殺されたんだ！！」

「何だかんだ言っても自殺は罪じゃからの。地獄行きじゃ」

十分前に失恋で自殺した少年は神様の一言で地獄に落とされた。

(後書き)

一言でもご感想お待ちしています。

『ネコが勇者の異世界召還論』連載中。こちらを読んでみてください。
い。

くあらずじ)

私(ネコ。超賢い)と飼い主(あるじ。超ヘタレ)が異世界に召還
されてしまった。

ついにあるじも勇者デビューか出世したなあ、と思っていたのだが

【魔法】が使えたのは私で、つまり猫である私が勇者!?

それなりに本格的な異世界召還ファンタジー!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6540j/>

自殺の証明

2010年10月9日21時21分発行